

作物

【麦類の追肥】

本年度は播種後の出芽状況は良好で、10月下旬播種の麦は高温の影響により越冬前の生育が平年より旺盛です。一方、大豆後に麦の播種を行う地域では、大豆の収穫作業の遅れから麦の播種作業が遅れました。特に12月に播種を行ったほ場では麦の生育が遅れています。

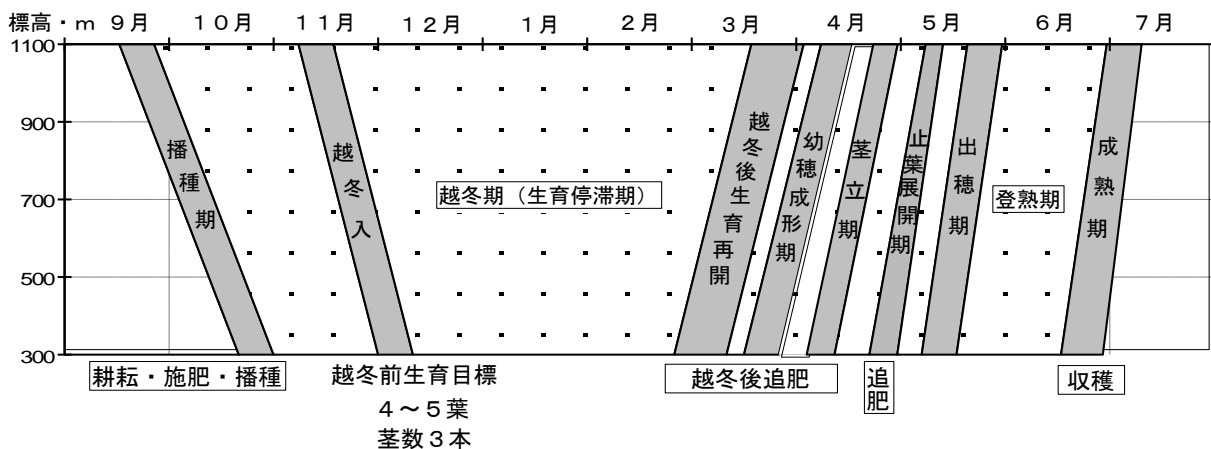
12月以降の極端な晩播は生育量の減少、春先の雑草多発、減収に繋がります。豆の後作などで作業が遅れた場合も、遅くとも11月中には播種を行えるようにしましょう。大豆の作付け面積・作業計画も含めて全体の行程を見直す必要があります。

麦類の越冬後の追肥量は、生育状況に応じて決定します。越冬後の一回目の追肥は、越冬後～茎立期に茎数を確保するために行います。追肥時期が早いほど穂数を増加させる効果が高いため、茎数が少ない場合は早めに施用します。

表1 越冬後の生育量と麦の1回目追肥時期・量の目安

越冬後の生育量		追肥時期	追肥量 N量(kg/10a)
m ² あたりの茎数	麦の見た目 (播種した部分)		
200本以下	2葉程度(出芽しているが分けつしていない)	2月末	N4~5 (硫安20~25kg)
200~300本前後	3cm幅くらいの带状 ところどころ途切れている	3月初旬	N4 (硫安20kg)
400~500本前後	3cm幅くらいの带状	3月上旬	N4 (硫安20kg)
600~700本前後	5cm幅くらいの带状 ところどころ途切れている	3月上中旬	N3 (硫安15kg)
700~800本前後	5cm幅くらいの带状	3月上中旬	N2 (硫安10kg)
1000本以上	10cm幅くらいの带状	3月中旬	N1~0 (硫安5~0kg)

参考：標高別麦の生育と栽培管理



＜追肥の時期別効果＞ 越冬後の生育量と追肥時期（長野県主要穀類等指導指針より）

越冬後の茎数	追肥時期	追肥の効果						
		生育回復	茎数増	穂数増	1穂着粒数	収量増	タバケ向上	倒伏
700本/m ² 以下	越冬後 (3月上旬)	◎	◎	◎	△	◎	—	影響小
700～1000本/m ²	幼穂形成期 (3月中～下旬)	△	○	◎	○	◎	—	影響小
1000本/m ² 以上	茎立ち期 (4月上旬)	—	△	◎	○	◎	△	影響大
	止葉展開期 (4月下旬)	—	—	—	△	△	◎	—

◎:効果大 ○:効果やや大 △:効果あり —:効果なし

- ・茎立ち期とは、節間伸長開始時期で、主幹長が2cm程度となった時期です。
- ・茎立ち期以降の追肥は倒伏の危険があります。

※基本的には雪がとけてから追肥しますが、雪どけを待つと追肥時期を逃す場合や、雪どけのぬかるみや停滞水で施肥作業が困難になる場合など、作業が可能なら、多少の積雪があるうちに追肥を行っても差し支えありません。なお、施肥にあたっては播きムラにご注意ください。

【麦畑の雑草防除】

長野管内では、特に連作のほ場において、ヘアリーベッチやオオブタクサ等の雑草が問題となっています。麦ほ場で雑草が繁茂すると、雑草に肥料を吸われて麦の生育が抑制されるのに加えて、せっかく追肥した肥料も十分に効かず、減収・品質低下に繋がります。また、コムギ赤かび病等の防除効果も劣る可能性があります。連作ほ場で毎年雑草が問題となっている場合は、播種後の除草剤に加え、生育期処理に登録のある除草剤を使用します。

また、下記のようなカラスムギやヤグルマギクなどの難防除雑草は、一度ほ場に侵入し繁茂すると防除が困難となります。そのため、麦類の播種前に発生した個体を耕起作業、非選択性除草剤散布によって完全に防除しておくことが重要です。多発した場合には、他作物への転換を検討します。



カラスムギ



ヤグルマギク